

□10月9日礼拝説教(隅野徹牧師)短縮版
「自分で背負いすぎない働き人」ルカ10:25～37

このたとえ話を理解する上で欠かせないのが「律法が、祭司は遺体に触れてはならない」と教えていることです。祭司やレビ人が、血まみれになって倒れている人が倒れていても「死んでいるかも知れない」と思ったら、近寄らず、道の向こう側を通って行くことは十分考えられます。それは「倒れている人を助けないことを正当化するために、律法を持ち出せた」ということにもなるのです。一方で律法を知らない「サマリア人」は、「人助けをしないでも自分を正当化できるものを持っていなかった」のですが、しかしそれでも律法の中の一番要である「隣人愛」を実行したのであります。

イエスがこのたとえ話をされている「その相手である、律法の専門家」も自分を正当化しようとしていたのです。「律法を学んでいる、知っていることをいいことに「必要な助けをしないのに、悪かった…と自分なりに反省することもせず…逆に自分を正当化しようとする、譬え話中の祭司やレビ人」このたとえ話をされて律法の専門家はきつと耳が痛かったことと思います。

自分を正当化する人間的な賢さを捨てなければ隣人を愛することができない！そのことがこの箇所から教えられるのではないのでしょうか。イエスがなされた「善いサマリア人のたとえ」話を通して、「自分を正当化せず、謙遜の心を持つこと」それが隣人を愛することへの入口であり、そのことと繋がっている「永遠の命への入口」なのだと教えられています。

私が今神学校で学ぶ人たち、これから学ぼうとしている人たちに望むこと、それは「知識を詰め込んで変に頭でっかちになるより、人間的な賢さを捨てて、愚直に隣人を愛そうと志してほしい」ということです。皆さんも同じ思いをもって祈って下さったら幸いです。(終)